

日本細菌学会 関東支部ニュース

第12号

第63回日本細菌学会関東支部総会を開催するにあたって

総会長 渡 辺 武 彦
日本歯科大学教授
(歯学部細菌学教室)

平成元年10月12日の総会におきまして次期(第63回)総会の総会長の指名を受けましたが、浅学非才の身ですので伝統ある当総会の総会長をお引受け出来る立場ではありません。しかし、早くも時は過ぎ30有余年間、一方ならずお世話になり、今日を迎えることができました。そのお礼と感謝の意も含めましてお引受けさせて頂きました。

春期に開催されます同総会は 特別講演とシンポジウムから構成することが慣例になっておりますので、この度も、これを踏襲させて頂き、特別講演1題、シンポジウム2題からなる構成と致しました。また、ご案内のごとく期日は平成2年6月9日(土)、会場は野口英世記念会館(新宿区大京町)で開催させて頂きます。なお、総会の演題、演者等はプログラムでご案内の通りです。いささか偏見のきらいもありますが、その責任は総会長である私にあります。

特別講演は、小林宏行教授(杏林大・医・第一内科)にお願い致しました。講演の主題は“細菌付着と組織の相互作用”でして、先生のご専門であります肺胞気道系の感染症、特に病原微生物の侵入と組織への付着を中心に致しまして、宿主と微生物の相互作用、さらに、それに伴う難治性疾患における問題点等をベットの立場から基礎的問題点に目を向けられ、これまでに進められたご研究の経過をお聞きすることができると思います。

シンポジウム-Iは、北野繁雄教授(明海大・歯・口腔微生物)にお願い致しまして企画させて頂きました。主題は、“骨吸収を伴う



感染症”と致しました。そして、ご案内のごく6名のシンポジストにお願い致しまして、それぞれの分野における研究の現状をお聞かせ願ひ、最後に総合討論をしていただき、この疾患の発症、進行、治療にまで言及していただくことを勘案しております。

この課題を本総会で取り上げることに就きましては、妥当か否か賛否両論があることは承知しておりますが、口腔領域にも微生物性疾患が多くあり、その中で現在最も注目されているこの疾患に取り組んでおります研究者は懸命な努力をしております。しかし、この疾患は、口腔常在微生物と宿主とが複雑に絡み合ったものであるため、発症と進行のメカニズムはまだ未解決の状態にあります。そこで、この機会に研究の現状をお示しし、各分野におきまして勢力的にご研究を進めておられます会員各位からきたんのない、ご助言を頂きますことをお願いしまして、あえて取り上げさせて頂きました。

シンポジウム-IIは、新井俊彦教授(明治

薬大・微生物)にお願い致しまして企画して頂きました。主題は、「新しい細菌学研究の方向を探る」です。現在、細菌学の研究を広く見渡しますと、薬剤耐性、病原機構、免疫、毒素等の研究が主要な分野として浮び上がってきます。そこで、これらの研究分野から一題ずつトピックを選び、プログラムでご案内

のごとく4名のシンポジストに各分野における研究の現況をお話していただき、最後に総合討論をお願いしまして現況を浮き彫りにして、これからの研究の糧となることを願って企画した次第です。

会員各位のご賛同を頂きまして有意義な総会となりますことを願っております。

『考えよう！ これからの支部活動』

支部ニュース小委員会

支部総会の在り方や支部評議員の選出方法などにつき現評議員によるフリートーキングが行なわれた。

○支部総会について

支部総会での一般演題数の減少は関連領域学会の独立と本部総会での一般演題数の制限解除によるものと考えられ、シンポジウム形式へと移行した。支部総会の活性化には若い会員の積極的参加と一般演題発表の増加が必要である。その具体策について討議された。

- ①本部総会に出題したものでも支部総会に再度出してもよい。
- ②ポスターによる一般演題発表は十分な討論が期待できる。しかし、スペースの確保や方法がその成否に影響する。
- ③シンポジウム、特別講演は本部総会との重複が多い。一般演題を主体にすべきである。
- ④シンポジウムは有意義であり、支部独自の仕方を考える。
- ⑥総会長の個性を尊重する。

最近の支部総会では色々な努力がなされており、水上での総会では総会長と座長との事前の打合わせにより討論を活発にすることに成功した。横浜では、積極的な一般演題の募集と討論の時間延長を行い総会を盛り上げた。また、次回の総会では一般演題はすべてポスターで行われる予定でその成果が期待される。このように各総会長の配慮が評価できるとの意見が多かった。

○支部評議員について

基本的には役員としての評議員は支部総会の活性化に大きな比重を占める。現在の支部評議員は実質的に理事の役割を果している、

の認識に立った上で、その数と選出について論じられた。

☆評議員の数

①評議員を75名位に増やす。評議員をユニット代表として位置づけるのが上記の案の根拠。昔は主な研究機関として15位があり、評議員を兼ねた理事という考え方で充分にその役割を果せた。しかし、現在では研究機関の数も遥かに多くなり、評議員の数は現状に合わなくなってきた。会員20名に1人とするとおおよそ75名となる。

②評議員の数は現在のままとし、他学会員の参画機関を作る。但し、学術上の諮問に答えるといった事項に限定すべきである。

③評議員の数は現状のままで、支部長のサポーターグループとして若い研究者あるいは周辺領域の研究者を委嘱する。

④評議員の数を5名増やす。③に近い案とも言えるがサポーターグループはやはり評議員とした方が活動し易い。

評議員の選出が選挙によって行われることと関連し、この5名は支部長の指名評議員とする。

☆評議員の選出

投票率をもっと高くする妙案はないかということが話題になったものの、会員による選挙という選出方法そのものは評価する。しかし、評議員の固定化を避け、若い研究者あるいは新人がもっと評議員になれるようにすることが重要であるとの意見があった。

①評議員の任期は連続2期(6年)まで

現在の選出方法では大きい研究機関からの選出が容易である。これが評議員の固定化とも密接に関連している。従って、評議

員の任期は少なくとも連続2期までとすることにより人事の固定化を防ぐことができる。

②指名評議員

理学部、獣医学部あるいは歯学部関係の

研究者の細菌学会離れという現実がある。このような立場の研究者を糾合することこそ関東支部の活性化の一因となる。このためには、支部長指名ということで評議員をお願いする方法もある。

可能性を見出す努力をする前に困難にばかり着目して いては、我々の学問も学会（関東支部）も進歩しない

久 恒 和 仁

（評議員、城西大学薬学部・微生物学教室教授）

私はひと頃まで、人間（人類）の現在と将来の生き方についての教訓は、やはり同じ人間（人類）が歩いて来たその過去の生き方（生きざま）、換言すれば人間（人類）の歴史の中からしか学びとることは出来ない、とかたくなに信じて来た。しかし、この考えは1年前の或る日、一冊の単行本との出会いによって見事に覆されることになった。それは、日本の代表的なサル学研究者の一人、河合雅雄氏の“学問の冒険”（佼成出版社）によってである。欧米に比べて大きく遅れをとっていた我国の霊長類学において、サルの餌付というそれまでにない独特の行動的方法論を編み出すことによって日本のサル学研究は飛躍的な進歩を遂げるに至った。昭和28年9月ある日、宮崎県幸島の一主婦から、一匹の若いメスザルが砂浜に投げられたサツマイモを海水で洗って食べているという電話が同氏のところにかかって来た。これが今世界的に有名になった芋を洗って食べる幸島のサルの第一報であった。それまでは、サルはひたすら海を恐れ、彼らにとって海とは危険以外の何ものでもなかった。海水には絶対に入ろうとはしなかった。しかし、海水でイモを洗うことを経験的に覚えたサルは、次に海で泳ぐことを覚え、そのうちに岩から海へ飛び込み始め、ついには海に潜って海底の海草をつかんで浮び上り、これを食料として食べ始めるに至ったのである。ここに特筆すべきことがある。それは、海水でイモを洗うことを覚え、海に慣れて嬉々として泳ぐのは若いサルばかりであって、大ボス、中ボスを始めとする年とったサル（大人のサル）は絶対に海水に入ろうとしない事であった。後者にとっては、海は

相も変わらず危険そのものでありサルに対して危害を与えるものでしかなく、しかも、イモを海水で洗ったり海水に潜って海草を採取しなくとも、この連中は何の苦勞もなく楽々と地上で食っていけるという事であった（以上の一部は、4月2日の朝日新聞・天声人語にも紹介されている）。危険そのものであった海に敢えて挑戦する冒険によって食物のより効果的な新しい食法と、海底の海草という彼らの新しい食料資源を見出すことができたのは若いサル達だけであった。このことは、まぎれもなく、幸島のサルにとっての“新しい文化”の胎動の担い手が若いサル達であったという事実を示したことになる。これは正しく我々人間の進歩にとっての極めて重要な問題と反省を喚びかけている。

我々は、青年期や壮年期の前半を過ぎる頃から、年をとるにつれて徐々に考え方が保守的になってゆくことは、このわが身を省みても明らかである。無意識のうちに現状維持に傾き、既成の概念や既存の権威・権力によって生ずる弊害に無神経となり（あるいはこれに依存し?!）、これを改革するための可能性を見出す努力をする前に、先づこの改革への挑戦に伴う困難にばかり注目しがちとなる。その結果が、可能性を見出す努力を怠るどころか、研究や学会の進歩のための若い人達の冒険的挑戦に水を掛けることになりかねない。

現在、関東支部評議委員会（これは支部の執行部に相当する）では、徳永徹支部長の進歩的な方向性のもとに今までになく支部活動の活性化が叫ばれている。それも今期になって増えた若い評議員を中心とした人達によってである。私は、以上述べたことを基に、関

東支部の活性化には、何をさしおいても先づ評議員の「若返り」こそが最重要であり急務であると信ずる。そのために、支部の現在の規約を「評議員の任期は連続2期まで」と改制することを全面的に支持したい。人類は4,000年の古から「今どきの若い者は」とい

う言葉を言い続けて来た。しかし、私は、関東支部の若い研究者の良識と高い見識を信じたい。そして何よりもまして、彼等の爽やかで潑刺とした冒険的挑戦の気概とその若々しいエネルギーに期待するものである。

フォーラム

『ブドウ球菌エンテロトキシン

研究に学ぶ』

東京都立衛生研究所微生物部

五十嵐 英 夫

ある時、考古学者の学芸員の話聞いて共感を覚えた。それは、歴史学の中の考古学と言う話であった。現代の考古学は発掘された出土品を種々の科学的な方法を駆使して、データを集め、そのデータをもとに古代への推理を進展させ、それを基礎に歴史が解明されていく。この過程で、自然科学及び社会科学の広範な学会との関わりの必要性を力説されたことである。

私はその話を聞いたとき、ブドウ球菌エンテロトキシン（エンテロトキシンと略）の研究を振り返って考えてみると、考古学者の言っておられることと全く同じではないかと思えたのである。エンテロトキシンはブドウ球菌食中毒の原因物質として発見された。そのため、この研究は食品衛生領域で主として発展した。ブドウ球菌感染症における役割については、コアグラゼや溶血毒などの産生性が中心に検討され、エンテロトキシンについては全く検討されなかった。その理由としては、エンテロトキシンの簡易な検出法がなかったために、黄色ブドウ球菌の性状の一つとして考えられなかったからと思われる。

1978年、Todd 博士らは初めて、toxic shock syndrome (TSS) という黄色ブドウ球菌の産生する毒素により惹起される疾病を提唱した。種々の原因究明のための研究が実施され、その起因毒素はTSS toxin-1 (TSST-1) であることが証明された。その後の研究で、TSSはTSST-1以外にエンテロトキシンによっても惹起される可能性のあることが明らかにされた。エン

テロトキシンは、この研究の黎明期にすでに、生物活性の一つとして強いマイトジェン活性を有することが明らかにされていた。TSST-1の研究において、TSST-1を含めてエンテロトキシンのマイトジェン活性が再確認された。最近、マイトジェン活性の作用機序研究において、これらの毒素はT細胞マイトジェンでありながら、T細胞との直接的な結合がなく、アクセサリ細胞上の主要組織適合性抗原複合体 (MHC) のクラスII分子に結合し、T細胞を活性化することが証明されている。このように、エンテロトキシンは動物の免疫系に非常に深く関与していることが解明されようとしている。現在では、エンテロトキシンは免疫学領域の研究において、興味ある試薬の一つとして考えられている。

今後の課題は、ブドウ球菌の産生するエンテロトキシンやTSST-1が免疫系に深く関わっていることは、何を意味するのかを解明することではないかと考えている。この解答を得るために、エンテロトキシンの研究は、さらに新しい領域への展開が期待されている。エンテロトキシンの研究を通じて、ただ一つ分野にとどまらず、種々の分野への発展につながることを体験したので、その雑感を記した。

『開発途上国における協力』

東海大学・医・微生物学

田 爪 正 気

Habari yako (こんにちわ)。私は1988年8月から1年間JICA からケニア共和国に派遣され、下痢症を中心とした感染症制圧に関するプロジェクトに参加した。日本からの無償資金協力によって建てられた、ケニア中

中央医学研究所（KEMRI）は基礎医学、臨床医学における研究成果を地域住民に還元していくことを目的としている。KEMRIにおけるJICAプロジェクトは（下痢症の細菌生態学的アプローチ）、ウイルス学（ロタウイルスによる下痢症および肝炎ウイルス）、寄生虫学（ビルハルツ住血吸虫症の対策）の各部門によって感染症対策のための研究が実施、推進されている。

ケニアはアフリカ大陸中央部の東海岸に位置し、東はソマリア、北はエチオピアとスーダン、西はウガンダ、南はタンザニアと国境を接し、南東部は約400kmにわたってインド洋に面し、国のほぼ中央を赤道が走っている。地球の割れ目といわれる大地溝帯、グレートリフトヴァレーがケニアのほぼ中央を南北に貫き、周囲の高地よりも低くなっている。首都ナイロビは標高1,700mのところであり、その周辺はコーヒーや紅茶の栽培が盛んであるが、最近、ナイロビの北約40kmの所にあるThikaでは日本の技術援助によってマカデミアナッツの栽培が可能になった。国土の大部分を占める高原地帯は温暖な気候のサバンナ気候、沿岸部は高温多湿の熱帯性気候、北部の半砂漠地帯は雨量が少なく、気候は多様である。季節は雨期と乾期に分けられ、大雨期が3月末から5月、少雨期が11月頃、それ以外は乾期で四季はない。ケニアの総人口は約

2,000万人。公用語はスワヒリ語であるが、英語も広く使われている。

細菌学部門は野外実験のためにナイロビから約40km離れた村落を設定し、週三回程、ケニア人のカウンターパートと共に村にあるヘルスセンターに下痢便をとりに行く。昼食は現地の食堂で食べるのだが、身についた習慣はおそろしいものである。ケニアの人々が指で食事をするということは聞いて知っていた。カウンターパートをはじめケニア人はナイフもフォークも使わず指を使って食べ始めたので、私もつられて指を使って食べ始めた。半ば食べ終わったころはたと気が付いた。下痢症が経口感染である以上、汚れている指を使って食事をする習慣を止めるように指導することが必要なことではないのだろうか。首都ナイロビではナイフとフォークを使って食事しているので、うまく指導すれば田舎における悪い習慣を打破できると思われる。しかし、日本的思考で物事をHaraka haraka（いそいで）ですすめてもうまくいかない。現地人と同じ思考の基盤にたつてPole pole（ゆっくり）と事を運ばなければ成功しない。当然のことではあるが、我々の開発途上国に対する協力は現地の風俗や習慣を理解したうえで成り立つのではないか。Kwaheri（さようなら）。



研究会の紹介

◎日本ビフィズス菌センター

本センターは文部大臣の設立許可による財団法人であり、ビフィズス菌を中心とした腸内菌叢と宿主とのかかわりあいに関する学術情報の収集、提供を行うことを目的とし昭和56年に設立された。おもに次の事業を行っている。1)学術集会の開催（毎年）、2)機関誌の発行（和文誌“ビフィズス”、英文誌“Bifidobacteria and Microflora”）、3)ビフィズス菌種の保存と供給。現在、多数の機関誌購読会員をかかえ、学術集会にも約300名の参加をみる団体に成長した。英文誌掲載論文も

国際的雑誌に引用されつつある。

◎“細菌の病原性とその分子遺伝学”研究会

“細菌の病原性とその分子遺伝学”研究会は、昭和60年に発足し今年で6年目を迎える。この間35のシンポジストが話題を提供し、過去5回のテーマは、第1回：赤痢菌（吉川昌之介）、第2回：サルモネラ（中谷林太郎）、第3回：緑膿菌（寺脇良郎）、第4回：細菌蛋白毒素（竹田美文）、第5回：グラム陽性菌（橋本一）となっている。この会は細菌の病原性を分子遺伝学的手法を中心に理解を深め

ることを目的にしているが、細菌の病原性に関わる個々の因子の分子レベルの話から菌の感染そのものまで、広い範囲を対象にしてきた。また発表には十分な時間をとり、活発な討論が毎回行われている。研究会には会員の制度もなく、したがって会費もない。運営は、当日の参加者からの募金と日本細菌学会関東支部からの援助により行われている。一方、運営の方は、委員の先生（上述の先生がた）に今年から新たに水口康雄、寺門誠致両先生をお迎えして、会の若返りと一層の充実を図ることになった。毎年初夏に開かれる会は、今回は水口先生が世話人をされる。

ここ数年の欧米のこの分野に於ける進歩と競争の激しさは、我々にこの分野の重要性をあらためて教えてくれる。したがって本研究会が、全国の細菌病原性の分野とそれに関連する研究者、特に若い人々（気持ちの持ち方が若い人も含む）、の交流の場として些かなりとも役立ち得ればと願っている。

◎実験結核研究会

年2回（春秋）開催、次回は第60回開催予定。

◎臨床抗酸菌研究会

年1回（春）開催、次回は第13回開催予定。

集 会 案 内

○IBiC (International Bifidobacterium Conference)

主 催：日本ビフィズス菌センター

会 期：1990年9月12・13日

場 所：経団連会館（東京）

内 容：ビフィズス菌をはじめとする消化管内細菌叢に関する学術集会。日本内外からの演者によるシンポジウム及び一般演題（ポスター）

問い合わせ先：

日本ビフィズス菌センター

〒113 東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル内

TEL 03-817-5806, FAX 03-817-5800

○第6回「細菌の病原性とその分子遺伝学」研究会

日 時：1990年7月21日（土）PM 1:00～4:00

場 所：産業医科大学ラマツィーニホール小ホール

主 題：細菌の産生する細胞溶解毒の分子遺伝解析と作用機構

- 演 題：1 Pseudomonas cepacia 溶血毒素
2 ブドウ球菌 α 毒素の作用機構
3 Clostridium perfringens α 毒素の溶血作用機構
4 Vibrio vulnificus の溶血毒素
5 腸炎ビブリオ耐熱性溶血毒素及び類縁毒素の作用機構
6 腸炎ビブリオ溶血毒素遺伝子の解析

世話人 水口康雄

〒807 北九州市八幡区医生丘1-1

産業医科大学・微生物学教室

TEL 093-691-7242



○第35回ブドウ球菌研究会

期 日：平成2年9月29日(土)～30日(日)

会 場：東京医科大学病院(6階) 臨床講堂

東京都新宿区西新宿6-7-1 TEL 03-342-6111

世話人：金 兌 貞(東京医科大学 微生物学教室)

東京都新宿区新宿6-1-1 TEL 03-351-6141(内線240, 241)

シンポジウム：ブドウ球菌の型別 — 診断・治療・疫学への応用 —

一般演題：(29日午後～30日午前)

基礎、臨床より広く募集致しますので、ふるってご応募下さい。

※申込方法：演題名、発表者名(演者には○印を付)、所属機関、200字程度の抄録(B5版原稿用紙使用)、演題受取り通知用ハガキ(演者の住所、氏名を表記)を同封の上書留郵便にてお送り下さい。

※申込締切：平成2年7月31日(火)

※送付先：〒160 東京都新宿区新宿6-1-1

東京医科大学 微生物学教室内

第35回ブドウ球菌研究会世話人 金 兌 貞

TEL 03-351-6141(内線240, 241)

○第19回薬剤耐性菌シンポジウム

日 時：平成2年8月23日(木)正午～25日(土)正午

場 所：伊香保 観山荘

特別講演：杉中秀壽先生(広島大歯・口腔細菌)(基礎)

小野寺昭一先生(慈恵医大・泌尿器)(臨床)

シンポジウム：キノロン剤耐性化をめぐる

一般演題：薬剤耐性菌の疫学的、生化学的、遺伝学的解析

一般演題募集

多数の方々への演題申込みを期待しております。演題申込みと引換えに抄録原稿用紙をお送りいたします。

抄録原稿締切日：平成2年7年15日

尚、未会員の方は事務局まで御連絡ください。

事務局：〒371 前橋市昭和町3丁目39-22

群馬大学医学部薬剤耐性菌実験施設

TEL 0272-31-7221(内線2584)井上, 大久保

『お 知 ら せ』

★関東支部では学術集会補助を目的として補助金「1万円とハガキ100枚」を準備しております。補助金をご希望される学術集会主催者は関東支部事務局(国立予防衛生研究所, 徳永支部長)にお申し込み下さい。

★関東支部支部ニュース小委員会では「支部および評議員への要望, 会員間の意見交換, その他随筆などの発表の場」として, 支部ニュースを多いに活用していただくために,

会員からの投稿を受付けています。原稿(1200字以内でお願いします。短くても結構です)は関東支部事務局までお送り下さい。



◎ミニニュース◎

秦 藤樹先生（北里大名誉教授）、大村 智先生（北里研究所副所長）に平成2年度の学士院賞が贈られました。対象となった研究業績は「生物活性を有する微生物代謝産物、特にマクロライド抗生物質に関する研究」です。

議 事 録

・第3回評議員会

日時：平成元年9月30日（土）14時～17時

場所：国立予防衛生研究所 第一会議室

出席者：五十嵐英夫、池田達夫、岡村登、金森政人、川上正也、河野恵、笹川千尋、島村忠勝、光岡知足、三上襄、橋本一（第62回支部総会長）、渡辺武彦（第63回支部総会長）、徳永徹（支部長）、島田俊雄、中村明子（幹事）

欠席者：新井俊彦、北野繁雄、高橋昌巳、鶴純明、久恒和仁。

議題：

1. 第62回支部総会準備状況報告。

橋本支部総会長より準備状況について報告があった。

開催日：平成元年10月12日（木）、13日（金）。

場所：群馬県水上、ホテル聚楽。

内容：特別講演およびシンポジウム各1題、一般講演は42題

2. 第63回支部総会準備状況報告。

渡辺支部総会長より準備状況について報告があった。

開催日：平成2年6月9日（土）。

場所：野口英世記念会講堂。懇親会会場も同施設内の予定。

内容：シンポジウム2題、特別講演1題を予定している。一般講演の募集はない。

特別講演：小林宏行教授（杏林大・医一内科）細菌付着と組織の相互作用

シンポジウム-I：歯周疾患関連細菌とその宿主応答性

シンポジウム-II：新しい細菌学の方向を

探る。

参加費：（正会員3,000円、学生会員1,000円）。

なお、会員以外の参加も認めるが、参加費に関しては総会長に一任する。詳細は日細誌に掲載の予定である。

3. 平成元年度決算報告

平成元年度決算報告書（別紙）について支部長より報告があった。なお、平成元年度収支決算は平成元年9月30日（土）に笹川、岡村両会計監査により監査を受け、承認された。

4. 平成2年度予算案の件

平成2年度予算案（別紙）について支部長より編成の方針と案の説明がなされた。討議の結果総会開催費は総会のあり方の検討が行われているので、当面従来どおりとした。小委員会の活動は一層重視することとし、小委員会費を前年度の6万円から9万円に増額し、小委員会出席者の交通費は別に交通費の費用で実費を支払うことにした。したがって交通費は8万円から10万円に増額した。また、会合費は10万円から7万円に減額した。

5. 各小委員会報告

各小委員会には評議員以外に臨時委員を加え得るが、新しく加える場合は評議員会に諮ってから決定したい旨支部長より指示された。

学術集会小委員会（川上委員長）：今後、橋本総会長の第62回総会のような魅力のある学術集会を開いていきたい。例えば、今回は一般演題をミニシンポジウム形式にし、各座長は担当する各々のブロックの内容について予め検討し、その解説とまとめをするという新しい試みがなされている。

将来計画小委員会（河野委員長）：支部総会では他の関連領域の話題についても取り上げ、他の領域の人達の参加を増やす方向で検討したい。支部総会のあり方については、来年の秋頃までに改正すべき点について具体的につめてみる。役員任期について検討した結果、長期にわたって役員をやらない方がよいのではないかと、2期ぐ

らいがよいのではないかとの意見が出されている。

支部長から支部総会の開催方法等について検討をしてほしい旨要請があり、川上委員長（学術集会）より、この問題にしばって将来計画小委員会と合同で検討会を開きたいとの意見が述べられ、支部長の提案で次回評議員会（1月13日）にそれを実行することに決まった。

支部ニュース小委員会（島村委員長）：支部ニュース11号は9月12日付で発送した。12号は平成2年4月20日前後に発行する予定である。原稿の締切は3月末日とする。その内容は、第63回渡辺支部総会長の挨拶、平成2年9月に開催される第15回国際微生物学会議（IUMS）の話題、フォーラム欄、ミニニュース等の掲載を予定している。

その他、支部ニュース担当者が各小委員会にオブザーバーとして出席しそこの“生の”討論内容を会員にお知らせするという計画が検討されている。また、当支部より学術集会補助を受けた研究会にはその内容等を支部ニュースに掲載するよう要請する。

6. その他

前回の評議員会において第63回および第64回支部総会に渡辺教授（日歯大）および山口教授（帝京大）が推薦され、徳永支部長が交渉の結果受諾された。

・第4回評議員会

日時：平成元年10月12日（木）

場所：群馬県水上、ホテル聚楽。

出席者：新井俊彦、五十嵐英夫、池田達夫、岡村登、金森政人、川上正也、河野恵、笹川千尋、鶴純明、久恒和仁、橋本一（第62回総会長）、渡辺武彦（第63回総会長）、山口英世（第64回総会長）、徳永徹（支部長）、島田俊雄、中村明子（幹事）

欠席者：北野繁雄、島村忠勝、高橋昌巳、三上襄、光岡知足

議題：

1. 第62回支部総会会務報告。

徳永支部長より第62回支部総会の会務報告の内容について説明があった（別紙）。

2. 第63回支部総会準備状況報告。

渡辺（日歯大）支部総会長より準備日程案（別紙）について説明がなされた。

6. 第64回支部総会準備状況報告

山口（帝京大）支部総会長より報告があり、開催日時、場所等は未定。なお、現在評議員会で支部総会のあり方についての討議がなされているので、その結果を踏まえて準備を進めていきたいとの報告がなされた。

なお、支部総会のあり方等に関しては、次回の評議員会の後にフリートーク形式で討議の場を設ける。

・第5回評議員会

日時：平成2年1月13日（土）14時～17時

場所：国立予防衛生研究所 第1会議室

出席者：新井、五十嵐、池田、金森、川上、河野、笹川、島村、鶴、久恒、光岡、三上、渡辺（第63回支部総会長）、山口（代理）

（第64回支部総会長）；徳永（支部長）、島田（幹事）

欠席者：岡村、北野、高橋；中村（幹事）

議題：

1. 第63回支部総会準備状況

渡辺支部総会長より準備状況について報告があった。

開催日：平成2年6月9日（土）

場所：野口英世記念館

内容：特別講演1題およびシンポジウム2題、一般演題の募集はない。

詳しい総会案内は日本細菌誌、45号№1（平成2年1月25日発行）に掲載された。

2. 第64回支部総会準備状況

山口支部総会長欠席のため、池田評議員が代わって準備状況を報告した。

開催日：平成2年11月13日（火）、14日（水）

場所：私学会館、300名収容可能な2会場を用意した。

内容：シンポジウムはいろいろな分野からの演者を考えているが、内容の詳細に関しては未定。特別講演は1題予定している。

なお、参加費等は従来どおりに行い、懇親会は13日（火）の発表終了後行う予定。

3. 各小委員会報告

支部ニュース小委員会（島村委員長）

支部ニュース12号は4月中旬発送予定。
第63回支部総会プログラムと同封して配布する。

内容：第63回支部総会長の挨拶；細菌学会
関連研究会の紹介；フォーラム欄；トピックス。

将来計画および学術集会小委員会の報告
は評議員会終了後のフリートーキングの場で、
討議参考資料が配布され行われた。

4. その他

評議員会終了後、出席者全員によって支
部総会のあり方や評議員定数およびその任
期等に関して、フリートーキング形式で活
発な討議がなされた。

その内容に関しては今後支部ニュースで
随時紹介される予定である。

◇編集後記◇

△…比較的若い世代の人達がいい放題の
意見を交わしつつ編集を始めて第3号目にな
ります。本号では「考えよう！これからの支
部活動」という支部会でのフリートーキング
の特集を組ませていただきました。すなわち、
若い会員の方に少しでも興味を持っていただ
こうという方針であります。会員の皆様も、
このざっくばらんな編集方針を理解していただ
いて、忌憚のない意見や希望をお寄せ下さ
る事を期待しております。

△…本号より研究会紹介欄を設けました。研
究会を主催される方はぜひお知らせください
(S.T.)。



日本細菌学会
関東支部ニュース
第12号

(1990. 4. 28)

発行：日本細菌学会関東支部
〒141 東京都品川区上大崎2-10-35
国立予防衛生研究所
☎ 03-444-2181
